

Ⅱ コリント 5 章 1～10 節 「主に喜ばれること」

皆さんは今、どのような願いを持っているでしょうか。どのような願いを持っているかによって、私たちの日々の歩みは方向付けられ、導かれるようになるでしょう。今日の箇所には、パウロの信仰に基づく願いが記されています。私たちキリスト者に今与えられているものとやがて与えられるものを対比して、今の信仰生活の動機や目標を示しています。

1. 天にある住まいへの切望（：1～4）

1 節。ここでは「地上の住まいである幕屋」と「天」における「神が下さる建物…永遠の住まい」が対比されています。私たちには今、「地上の住まい」があり、それはいつか壊れます。しかし、私たちには「天に…永遠の住まい」があります。ここで言われている「住まい」とは、住居のことではなく、私たちのからだのことをたえています。

2 節。地上の生涯にあつて私たちはうめいています。様々な苦しみを経験します。肉体においても、疲れや弱さを覚え、病気になり、罪を犯してしまいます。それで私たちはうめいています。それに対して「天から与えられる住まい」、栄光のからだをいただいて天の御国に住まうときには、もはや罪もなく、死もなく、様々な苦しみもないと教えられていますので、それはどんなに素晴らしいことかと思えます。パウロはそのことを「切望しています」と言っています。私たちは切望しているでしょうか。

3 節。これは、「幕屋を脱いだ」つまり死んだ後に、キリスト者がどのような状態にあるかを語っているようです。人が死ぬと、からだは埋葬されます。しかし、霊、たましいは消滅することはありません。やがて、キリストの再臨のときに、栄光のからだをいただいて復活します。その希望があるので、キリスト者はこの地上の歩みを、苦しみの中でも歩むことができます。

4 節。キリスト者が「重荷を負ってうめいて」いるのは、苦しみが続き、死んでしまいたいという否定的、絶望的なことではありません。重荷を負っている中でも、キリスト者は罪から救われ、永遠のいのちを与えられ、生かされていることを感謝できます。救いに入れてくださった神様が、救いの完成まで導いてくださることを信頼することができます。主が最後まで最善のうちに導いてくださることを信頼して従うことができます。

「死ぬはずのものが、いのちによって呑み込まれる」、つまり永遠のいのちによって死に勝利し、生かされることを求めて、「天からの住まいを上に着たい」、すなわち栄光のからだを与えられ、天の御国に入る日を待ち望むのです。そのように、重荷を負いながらも信仰によって歩むことができるように、信仰の歩みを全うすることができるようにとうめっているのです。

2. 地上の幕屋における歩み（：5～8）

私たちの信仰の歩みを、この地上での苦しみがある中で歩みを進めていくことができるのは、私たち自身の力によるものではありません。神様が始めてくださり、導いてくださり、完成させてくださるのです。

5 節。私たちの救いの保証として、神様は御霊を私たちに与えてくださいました。私たちが悔い改めて、イエス・キリストを信じることができたのは、聖霊が働かれたからです（I コリ 12：3）。また、私たちがみことばによって主の御声を聞くことができるのも、聖霊がみことばとともに働かれているからです（ヨハネ 16：7～8、13）。そして、私たちがみことばに従い、祈り、行動することができるのも聖霊が助けてくださっているのです（使徒 1：8）。

そのように聖霊が私たちの救いを始めてくださり、導いてくださいます。私たちを変えていってくださいます。ですから、パウロと共に私たちも「いつも心強い」と言うことができます。ただし、聖霊も目に見えるわけではありません。

6～7 節。「私たちは主から離れている」というのは、この地上での私たちの歩みにおいては、主イエス様が見える形であるわけではないということです。しかし、目には見えないけれども主の臨在が確かにありますので、「信仰によって」主の臨在を覚え、主とともに歩むことができます。

8 節。御霊が与えられているので心強いのですが、地上の歩みと主のみもとに住むのとどちらが良いかと問われれば、それは主のみもとに住むほうがはるかに素晴らしいのです。

パウロは主キリストと共に永遠を過ごすことを確信しているので、死をも恐れてはいませんでした。死に向かうのは誰でも未知のことなので不安になります。また、愛する人たちを残していくことは深い悲しみです。しかし、イエス・キリストを信じているなら、キリストとともにある永遠のいのちへの希望と確信を持つことができます。

若くして難病のために召された牧師が死を前にして奥様にこう言われたそうです。「私はいなくなるんじゃない。場所が移されるだけなんだよ」。そして、初めての外国旅行を楽しみにする人のように、天国での神との交わりを、聖徒たちとの交わりを、本当にうれしそうに話されたということです。

3. キリスト者が受ける報い（：9～10）

そのうえで、地上の幕屋から天の住まいに移される時は、主の御手のうちにあることですから、パウロは主に委ねて、こう言います。9 節。地上に生かされている間も、あるいは肉体を離れることになっても、パウロが心から願うのは、主に喜ばれることです。

キリスト者は救われた喜びから、神の恵みに感謝して、「主に喜ばれること」を願って、祈り、行動することができます。そして、肉体の死が先か、キリストの再臨が先かは分かりませんが、いずれにしてもキリストの再臨のときには栄光のからだをいただいて、天の御国に入れていただけるのです。その神の約束を信じて、その時に向かって歩むことができるのです。

そして、その時にはキリスト者たちが地上で生きたことに対するふさわしい報いを受けることができます。

10 節。この箇所は行いが救いの根拠であると言っているのではありません。そうではなく、信仰が本物であるなら、行いとなって表れるということです。そして、信仰によって誰でも救われるのですが、救われたそれぞれの歩みに対して、主の報いがあることも確かです。主イエス様は「天に宝を蓄えなさい」と言いました。パウロもこのことを分かりやすいたとえで語っています。I コリント 3 : 10～15。

私たちは信仰によって救われました。土台はイエス・キリストです。その土台の上に私たちはそれぞれ信仰生活という家を建てていきます。そして、キリストの再臨のとき、私たちの信仰生活という家が燃える火によって試されます。そして、主の報いを受けるのです。救われた者として、信仰の歩みに対する主の報いを期待して良いということです。もちろん、主が報いてくださる行いとは、自己中心に報いを求める行いではなく、神を愛し、隣人を愛する行いです。また、与えられた賜物の良い管理者として、賜物を用いて仕えることです。そのような歩みに対して主は「よくやった。良い忠実なしもべだ」と正しく評価して下さり、ふさわしく報いてくださるのです。

私たちもみことばによって教えられ、約束を信じて、確かな希望を持っています。聖霊が保証を与えてくださっています。悔い改めて、イエス・キリストを信じて、罪からの救いをいただきました。永遠のいのちに生かされています。ですから、主の恵みに感謝して、主に喜ばれることを願って、信仰生活を続けていきましょう。

この肉体によって歩むことには、弱さ、罪深さが伴います。この地上の歩みには様々な苦難が起こってきます。しかし、聖霊が私たちの内にいて下さり、助けてくださいます。悔い改めて、みことばに従うことで、主がきよめていってくださいます。私たちの間で良い働きを始められた神は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださいます。ですから、私たちは心強いのです。「私たちが心から願うのは、主に喜ばれることです」。この願いと祈りによって歩んでいきましょう。